



TITLE:

祝辞

AUTHOR(S):

裏田, 武夫

CITATION:

裏田, 武夫. 祝辞. 静脩 1984, 号外: 5-7

ISSUE DATE:

1984-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37825>

RIGHT:

したがいまして、今後の京都大学の教育・研究の発展にとりまして、この新しい図書館の発足というものが大きな意義を有するものと存じます。

施設の基本計画の段階から今日まで十余年の年月が経っているわけですが、この間、歴代の館長先生はじめ本学関係者の方々の並々ならぬご努力の積み重ねが、今日の立派な図書館の完成をもたらしたものだと思えます。

ご承知のとおり文部省におきましては、近年における学術研究の急速な発展と学術情報流通メディアの進歩による、学術情報量の著しい増大に対処すべく、昭和55年に学術審議会から答申をいただき、その答申の線にそいまして、新たな学術情報システムの整備にむけて、その具体化を鋭意努力しているところです。その中で、大学図書館が中心的な役割を担うことが期待されております。このため、大学図書館の整備、特に大学図書館がもっておりますすぐれた人的な能力、あるいは物的な資源を有効に活用していく仕組みをつくっていくことに努力を傾けているところです。

このように新しい学術情報システムの中におきまして、大学図書館の新しい発展というものが期待されておりますときに、本学にこのような立派な図書館が竣工し、開館されるということは、本学にとってはもとより、全国的な立場からみましても、たいへん大きな意義を有するものと考えます。

この新しい図書館では、読書環境の整備はもとより、図書館資料の有効な利用の推進等利用面で

の改善に努められるとともに、図書館業務の電算化により、高度な図書館活動の展開をはかり、あるいは、学術情報システムの一環を担うための体制を整備されるなど、新しい機能の充実にたいへん努力されておられるとうけたまわっております。

特に、学内のご努力によって実施されます高額参考図書の集中配置あるいは全学的な図書の収納計画にもとづいて行われますバックナンバー・センターの設置、さらに資料の共同利用をはかるために化学系雑誌の集中配置等々、研究図書館としての機能の充実に努められておられますことは、京都大学附属図書館の大きな特色であると存じます。林前館長、高村現館長はじめ館員の方々の意欲的な取組みと、これを支えてこられた全学の関係者の理解と支援に対しまして、あらためて敬意を表するものであります。

このような試みを含めまして、今後の京都大学附属図書館の活動に対しまして、全国の大学図書館から、注目が集まるものと思われます。文部省といたしましても、他の大学図書館のお手本となるような積極的な図書館活動が展開され、先駆的な役割を果たしていただくことを強く期待しているものでございます。

終りにあたりまして、今後とも、このすぐれた施設・設備を備えました京都大学附属図書館が十分に学生、研究者の方々に活用されまして、本学の教育・研究活動がより一層発展することをお祈りいたしまして、簡単でございますが、お祝いのことばいたします。

祝

辞

国立大学図書館協議会会長
東京大学附属図書館長

裏 田 武 夫



本日の開館おめでとうございます。ただ今ご紹介がありましたように国立大学図書館協議会の同僚を僭越ながら代表させていただき、また、日頃親戚同様にお世話いただいております京都大学のみなさまに対しまして、東京大学からお祝いと感謝の念を申し述べさせていただきたいと思えます。

実は、こちらへまいります前に何かの用件で平

野総長にお会いした折、「京都大学の附属図書館の開館式に行ってまいります。」と申し上げましたところ、「私も行きたいなあ」と手帳の日程を見ておられました。私はしめたと思ったのですが、俗に「将を射んと欲すれば馬を射よ」という言葉がありますが、私は全く逆でありまして、「馬（図書館）を射んと欲すれば将（総長）を射よ」というのが大切なことだと思っています。早い機会に平野総長がこの図書館を見に来られるというふうに聞いておりますので、その節はよろしくオリエンテーション、ティーチンをお願いしたいと思います。

京都大学のこんなに立派な図書館ができましたのは、私も前々からご指導いただいています林前館長、高村現館長のご努力は、もちろん外からみていて重々わかっているつもりでございますが、これは総長はじめ教官の方々、事務局の方々の本当に並々ならぬご苦労があったことと思うわけでございます。本当に心からお祝い申し上げたいと思います。

さて、私はしばらく前に京都にまいりまして、高村館長に工事進行中の本館を見せていただきました。本日も少し早目にまいりまして、あちらこちらみせていただいて全く感銘いたしております。非常に心を動かされました。と申しますのは私の勤めております図書館にないもの、実現したいと考えているものは、すべてこの図書館に備わっていることを発見したからであります。入口の明るさ、入りやすさ、カウンター的位置、カウンターといろいろなサービスポイントとの連絡、それから資料の論理的な配置、参考図書の排架能力（冊数）、開架図書の排架能力、リージョナルセンターとして、さきほど広田課長からお話しがありましたけれども、電算化に備えてのいろいろな配慮、本当に羨ましく思いました。京都大学の方は本当に幸せだと私はつくづく思います。私は深く感銘いたしましたが、本当に、この図書館ができて嬉しいのは誰だろうと考えますと、おそらく総長はじめ館長や先生方それぞれに嬉しいことだと思います。しかし、私は一番嬉しいのは学生ではないかと思いました。

最近、大学の教育の見直しということが深刻な問題になっております。共通一次試験実施以来、各大学の輪切り現象というのが深刻な問題として全国の国立大学の先生方の間で討議されているときいています。実際、折角いろいろと教師の側で配慮いたしましても、共通一次試験で何点だから、もう特に勉強する必要がないというふうに、徹底した輪切り現象ができていると聞いています。もし本当だとすれば非常に残念なことだと思います。これは共通一次試験のせいばかりではないと思いますが、私どももたいへん深刻な悩みがございます。教養学部の先生方に聞いてみますと、毎年20人くらいは本当に抜群の能力の学生が入ってくるそうであります。ところが卒業するときには、平凡以下の学生として出ていってしまうということでもあります。どうしてだろうか。これは、やはりそういう学生の意欲・関心というものを掘りおこしたり、つなぎとめておくだけの大学側の配慮がなかったと考えざるを得ない。優秀な学生はともかくとして、やはり一般の学生でも、大学に入ってきて勉強しようという意欲、関心というものを何となしに喪失してしまつて、卒業させてしまうということが、いかにも多いかということです。私どもも、いろいろと関係者の間で相談したのですが、やはり授業というか、教育もしっかりしなければいけない。しかし授業といつても、年間の開設する講義題目の種類というのは限度があります。時間・空間をこえた無数の教師から、いろいろの刺激をうけるという意味では、選りぬかれた情報をもっと学生が使い得るようにしておくということが大事なことではないかと思ひます。ご承知のように公共図書館もかなり充実してまいりまして、開架図書が10万冊を数えるところが増えてまいりました。東京の都心の大きな書店では、新刊書が10万～20万冊並んでいる本屋が少なくないようになりました。東京大学の生協の書籍部も十何万冊並べてあります。私どもの中央図書館では4万冊ぐらいであります。しかも古い、あまり魅力のない本がかなり並んでいるわけでもあります。すでに本屋さんと較べても負けてしまう。それから公共図書館と較べても本当に魅力

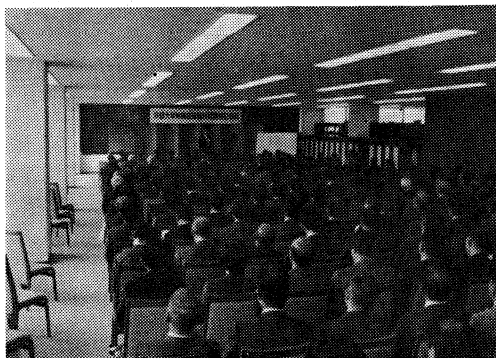
がない。これで、やっと入学試験にパスして大学へ進学した学生の意欲というもの、関心というものをつなぎとめられると考えるのは、むしろおかしいのではないのだろうか。私は、手もちの資料をどしどし開架に出しながら、何か、一生のめぐり合い、あるいは図書館へ来て、はじめて自分の何か、授業では得られなかったような知的な刺激を与えられるような機会をつくっていかう、ということ、もちろん授業に直接関連した従来の指定書を整備しておくことも大事でございますけれども、やはり何かのきっかけで、その学生たちの知的燃焼をたすけるようなことをしなければならぬと考えているわけであります。

図書館は、本を並べておいて、夜店のようにひやかしながら利用者が流れていくというだけでは全く意味がないわけであります。やはりスパークするとか、火花を散らすとか、そういう選びぬかれた情報と学生との間に知的エネルギーの燃焼といいますか、そういうものがなければ、本当は図書館というものの存在意味がないのではないかと思います。さきほど高村館長が、「図書館は大学における教育・研究の支援機関である」ということを明言されました。全くそのとおりで

あると思います。私もよい意味で京都大学の図書館に負けないように、新しく年々入学してくる学生が、まさに知的関心を燃やして、そして、教育・研究の上で充実した生活が送られるように、私どもの図書館も、ぜひ、よい意味での競争相手として、今後やっていきたいと思ひます。おそらく全国国立大学図書館協議会の同僚の方々も全く京都大学の図書館をご覧になれば、私と同じように感じられると思ひます。

私は古いことは知らないのですが、最後に、中国の古典「大学」の一句と聞いていますが、「つつしみて日に新たに、日に新たに、また日に新たなり。」ということばを贈りたいと思ひます。開館式当日の図書館がいちばん新しく、日に日に古びていくだけではないと思ひます。図書館が教育・研究の上で利用者のためになすべきこと、した方がよいことがらは無限にあるはずで、毎日のように、そうした営為と工夫がつみ重ねられるならば、高村館長のいわれる「年輪」がこの図書館の本に家具に壁にしみこんでくるに相違ありません。心からご発展をお祈りし、お祝いのことばに代えさせていただきます。

開館記念式典の挙行



3月21日（水）、京都大学附属図書館新館開館記念式典が、総長、部局長はじめ学内外の関係者多数の出席を得て、新館2階開架閲覧室（南側）

において挙行された。

この式典は、午後1時に始まり、高村仁一附属図書館長の式辞に続いて、沢田敏男総長の挨拶、廣田史郎文部省学術国際局情報図書館課長、裏田武夫国立大学図書館協議会会長（東京大学附属図書館長）の祝辞、岡本道雄前総長ほかの祝電披露、戸田建設株式会社ほか4社に対する感謝状の贈呈が行なわれ、午後2時終了した。

引き続き、午後2時20分から同開架閲覧室（東側）において披露パーティーが催された。

なお、3月22日（木）、23日（金）、24日（土）の3日間、学内者に対するオープンハウスが行なわれた。